

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

片付けない家

暮れの掃除騒動をしているときに、ふっと山本コウタロー氏の話を思い出した。綺麗好きな妻に対して片付けない夫。「片付けるのがいやなのに無理してやると、疲労が溜まる」というのだ。誰でも綺麗な方が好きで、綺麗になると気持ちよく、爽快さだけが残ると思っていたのに、疲労が蓄積されてはたまらない。片付けない選択をしているのに、伴侶に催促されてしぶしぶ綺麗な生活を送っているのだろう。

また他の男性も、友人宅のことを「あの家は綺麗過ぎてモデルルームのようで、落ち着かないから行かない」と言っていた。モデルルームのような素敵な家に住みたいという女性が多い中で、夢をかなえるためのしつらえが、はなから否定されてしまった。

どうやら居心地のいい家と、一糸乱れぬ清潔な家とは同意語ではないようだ。私の掃除の手を緩めるには、何といいことを思い出したものか。コウタロー氏の話は名古屋のモード学園のスパイラルタワーと一緒に講演した折に聞いたのだ

が、その後、コウタロー家は一階と二階の夫婦の住み分けをチェンジするリフォームを行ったと言っていた。自分自身が楽しめる人生を考えてリフォームするのが大事だとも。

コウタロー氏は二部で、一部は私が「リフォームで癒しのある暮らしを」と題して講演したのだが、屋上にジャグジーバスを作ったり、海の見えるお風呂を二階にしたり、趣味の電車のゲージが居間を走る家、ペットののためのリフォームなど、それぞれの思いをちりばめて話したが、最近ほ清掃性もリフォームのテーマになってきた。

お年寄りの家は自分が年齢を重ねただけ、家も築年数がたち、暮らしを重ねたぶん物が溢れていることが多い。

最終章の住まいとして快適な生活を望むなら、物の整理をする必要がある。収納面積を決めるにあたり、膨大な持ち物に呆然としながらも、三つの分類をお勧めしている。①思い出の品として用途に関わらず残すもの。②次世代に継承すべき貴重なもの。そして③今後

自分が必ず使うものだ。

その他は右目も左目もつぶって「えいや!」と処分する。ここまでお話しもなかなか減らないのだが、あと二〇年と人生を考えたときに、今後増えるであろう物たちのことも考えなければいけない。シンプルライフという言葉にあこれを抱く方が多いのも、それだけ煩雑な中で暮らししている証拠だ。

八〇歳まで、あるいは九〇歳まで生きるぞ! と言ったときから、どんな暮らしになるのかイメージする必要がある。

綺麗好きな人でも体力の衰えは否めない。片付けたくない人でも、散らからない家作りが大事になってくる。

壁面収納の扉を半透明のポリカーボネート板にした例がある。どこに何が入っているのかすぐ分かり、片付け場所も明確だからだ。

「片付けやすい家」あるいは「動線の短い家づくり」を再度考慮するのか、「片付けない家」にするのか、家族で話し合いが必要そう。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。